

令和3年度 薬学部・大学院医学薬学府（薬学領域）「部局長と学生との懇談会」要旨
テーマ：

（学部）「英語及び関連科目の履修と留学について」および「メディア授業について」
（大学院学生）「大学院共通教育について」

実施日時：令和3年11月17日（水） 16：30～17：35 （1時間）

場所：薬学部大会議室

参加学生数：学部生、大学院生 14名（学部生1～2年生はZOOM）

参加教職員：森部研究院長、伊藤（晃）副学部長、高野評議員、石橋副研究院長、佐藤薬学科長
小椋大学院教育委員長、秋田教務委員長、川島学生生活委員長

（事務）杉村学務課長、栗山副課長、金野副課長、大石大学院係長、瀬戸大学院係員、大熊学務係長
大学参加者：教育企画課係員

英語及び関連科目の履修と留学について

意見：

- ・英語 I (L&S) や interaction and presentation 科目など、講義形式よりも、学生同士がグループごとに発表や討論を行ったり、他の学生に向けて全体の前で発表したりと実践的な英語の練習を行うことを取り入れている授業やインタラクティブな授業が、有用であったという声が多数あった。
- ・上位学年になると研究室や就職後に英語を使う頻度が高くなり、コミュニケーションツールとしてリスニングとスピーキングの2技能が非常に重要となるため、大学で重点的に学ぶことができることが効果的であったと言える。
- ・大学で実施している外部英語検定（TOEIC や TOEFL）について、無料で受けられる機会があり、有意義であるという声が一定数あった。
- ・現在の英語授業に加えて、専門科目に触れ始める2年次や、特に薬科学科で選択科目が多くなる3年次に医療系・化学系に特化した英語の授業が受けられるといいのではないかと。
- ・現在開講している英語の授業のほとんどが西千葉キャンパスで行われており、亥鼻キャンパスなど西千葉以外のキャンパスに通う学生は、英語の授業を受けたくても専門科目の授業との兼ね合いから、あるいは単純にキャンパス間の移動に時間がかかるために受講しづらいため、対面/オンラインに関わらず、西千葉キャンパス以外のキャンパスでも英語の授業を実施してほしい。
- ・ENGINE 緊急代替措置であるオンライン留学について、渡航が難しい状況であり、安全性の観点からもオンラインによる留学プログラムが提供されたことが良かった。
- ・一方で、オンライン留学では留学先の日常生活を体験することが難しく、実際の留学と同程度の有益な経験を得られているとは考えられないという意見も一定数あった。

メディア授業について

意見：

- ・1年次生のうちは、普遍的な授業や基本的な基礎知識を学習していく講義が多かったため、映像や資料をもとに繰り返し復習することができ、且つ、時間の自由が利くメディア授業（オンデマンド型）は、メリットがあったという声が一定数あった。
- ・2年生，3年生と学年が進むにつれ，専門的な知識や実習・実験系の授業が増えるため，対面での授業の方が効果的であるという意見が多数であった。
- ・メディア授業（同時双方向型）については，インタラクティブに行われている授業が少なく，オンデマンド型と変わらなかったという意見の学生が多数であったが，一方でディスカッションやグループワークを行う授業であれば有用であったという意見もあり，適宜，ディスカッションなどを取り入れた授業を行うことが同時双方向型であれば効果的であると判断される。
- ・また，同時双方向型授業のうち，資料配布を行えない授業に関しては，回線状況によって見逃すなどの状況が生じた学生が試験の際などに不利益とならないよう，今後は対応を検討していく。
- ・今年度から実施されている，7+1（対面授業7回，メディア授業1回）の授業形式に関しては，オンデマンドの課題が負担となっているという声が多数あった。このことに関して，教員側でも，例えば，7+1回のオンデマンドを早めに実施するようにすることで，課題提出の締切りに余裕を持たせるなど，適宜，対応を検討する。

大学院共通教育について

【1】大学院共通教育の目的、育成する能力と科目構成の妥当性について

●目的について

・社会課題について考え、取り組む際に必要となる基礎能力（英語・プレゼン・データサイエンス・研究倫理等）を養う講義を、各学科の内容に則して開講されている印象を受けたため、目的に沿った運営を行っていると考え。講義についても言語教育やキャリア形成についての講義、多岐にわたる分野の科目が開講されており、身に付けたい能力・知識を効率的に学ぶことができると感じた。自身の専門分野を深めつつ専門以外の分野の学習を進め、それらの知識を組み合わせることで複雑な問題にも対処が可能になると考える。グローバリズムの観点からも日本の市場や経済が縮小する中で、今後これらを解決していくのに海外に目を向ける機会は重要であると考えため、適当であると思う。

●育成する能力について

・列記されている能力は、大学院修了後の進路に拘わらず、社会人として成果を創造していく上で一般的に必要とされる能力である。高度専門職業人養成については、他分野の知見を自身の研究に役立てるための第一歩となるため、研究の幅を広めるという点で非常に有用だと考える。指導力・教育力については実験を行ううえで、自身の専門的なスキルや実験結果を他者に上手に伝えることで新たな発見が出来るようになるため、特に必要な能力である。

・いずれの能力も大学院生に必要であるが、研究基盤能力や指導力・教育力に関しては研究室での学習が大きく寄与すると思われる。そのため、大学院共通教育として研究科に関係なく一括りにするものではないと考える。

●科目構成について

・4つの科目領域については、「大学院共通教育において育成する能力」に則した構成である。

研究科・学府開講科目については、少々専門性が高い講義が多い印象を受ける。仮に、研究科・学府開講科目の設定目的が学生の専門分野の拡張であるならば、開講部局にやや偏りがあるように感じられる（理系・医療系が集中しすぎている）ため、開講科目・内容を更に充実させる必要がある。

・「全学開講科目と研究科・学府開講科目の2種類」、および「4つの科目領域」はいずれも選択肢の数としては適切であり、選択したい講義を選択する一助になる。4項目の一つである「共通スキル」に関しては、プレゼンテーション能力の向上等どの学部にもふさわしい内容と、専門的な講義の両方が含まれており、このカテゴリーに含まれる講義内容の幅が少々広いと感じた。

【2】現在開講されている科目について

●医学薬学研究序説・生命倫理学特論について(受講生2名)

・研究序説に関しては、授業を受ける上での基礎知識などはそこまで必要なく、一部医療系学部生も学ぶような基礎的な内容を扱っている。特論においては、生命倫理の知識など内容自体は既習のものであったが、「現場での倫理的課題をどのように考えるか」という倫理学の視点から今一度医療倫理を学ぶことができた。そのため、医療系大学院生にとっては基礎知識を実践的な考え方に昇華できる新鮮な授業であった。同時に、文系学生にとっても、普段の文系的な考え方をを用いて医学薬学に触れることができる点で、専門外の分野としても取り組みやすく、有意義な授業になると考えられる。

・学部生講義で学習した医療倫理の内容の復習、また研究倫理の基礎的な考え方の学習ができたため、生命倫理学特論においては、表面的にしか学ばなかった生命倫理・医療倫理学を「課題解決の考え方」として改めて学ぶことができた点が有用であった。

【3】留学代替科目としての「デジタルヒューマニティーズ入門」「研究留学論」について

●デジタルヒューマニティーズ入門：

(有用であった内容)

・近年進歩するデジタル技術を利用して、実際の生活に活かす方法を学ぶことができた。これから先の研究では、人工知能などのデジタルな分野がとても大事になってくることを再認識できた。

(改善点)

・意見無し

●研究留学論：

(有用であった内容)

・各分野の先生方が研究留学を通して得た知識・考え方や、研究留学の際に意識されていたことを伺うことができ、研究者としての自身のキャリアプランを考える一助となった。また研究留学をする上での具体的な手引きや、注意点を体験談で聞いたことで良くわかった。

(改善点)

・研究留学論では全部質問形式にするのではなく、教授にフリートークをしてもらう時間を設けても良いと思った。

●留学代替科目として相応しい内容であったか

・留学ではスピーキングやリスニング等、活きた英語を学ぶことを期待していたが、これらの講義では学ぶことが出来なかった。また留学は環境の変化に適応する能力を養うことが重要である。この理由により留学代替科目としては相応しくないのではないかと考える。

【4】所属する研究科・学府・学位プログラムにおける単位の取扱いについて

・科目領域が4つ設定されていることを考えると2科目上限は少ないと思われるが、共通科目以外の各専門分野での学習・研究活動で補える内容も多いことから、妥当な数字と考える。

・特論・概論で履修できる科目は非常に専門性が高く、ほとんどの科目が所属する研究室で行っている研究内容と異なる内容である。また、修了要件の単位数を満たすため、特論・概論以外にがんプロセスを履修している学生も多くいる。そのため、大学院教育科目を選択できることで選択肢が広がり、より興味を持った科目を履修できる利点がある。

【5】具体的な科目の希望について

●希望科目やテーマ

- ・①（既に存在する科目だが、）留学に関連する科目の充実を希望。
- ・②数学（数学を学部で受講していない学生向け）
- ・③研究留学訓練

実際の研究留学に近い様式（資料や会話、発表も全部英語）を準備し、その中で研究を行う。

●希望する授業の実施形式（講義、演習、対面・オンライン等）

- ・①オンラインまたはオンデマンド
- ・②オンライン、亥鼻キャンパスの学生は西千葉で開講されている授業を取りにくい。
- ・③演習

●希望の開講時期

- ・①第1または2ターム
- ・②第3ターム、1限、研究の妨げにならないように朝が良い。オンラインであれば3限なども良い。
- ・③1年間

●希望理由

- ・①現在の科目が修士のみに開講されているため、6年制学部から4年制博士課程に進学した自分にとって、留学のための基礎的な情報を手に入れられる講義を受けたい。一般的にも、大学の掲げる全員留学を実施するに当たり、留学支援を目的とした講義は需要が大きいと考える。
- ・②データサイエンスが盛んな昨今、数学の知識は必要であるが、薬学領域では数学を習う機会が少ない。大学院生にも受講しやすい科目があれば良い。
- ・③いきなり研究留学に行くのはハードルが高すぎるから。

【6】今後の方向性について

●英語運用能力の向上のための英語科目について

・英語運用能力の獲得によりグローバル人材に成長することで、キャリアの選択肢の幅が可能であるため、本能力の向上を目的とした英語科目は大いに役立つと考える。特にスピーキング・ライティング能力は、日常生活の中で養う機会が限られることから、これらの領域に重点を置いた授業内容が望ましい。スピーキングにおいてはグループディスカッションを中心としたアクティブな学習や、英会話演習等英

語を使用することに焦点を当てるのが効果的である。

・リスニング・ライティング・プレゼンテーションが既に開講されているため、科目内容は十分だと思われる。授業内容については、英語論文執筆や国際学会での発表など実践的な英語スキルに特化した内容であれば効果的ではないか。現状、1科目当たり受講可能人数が10～20名程度であり、授業内容の必要性の高さに対して受講可能人数が限定される点は修正が必要ではないか。

●研究職を含むキャリアパスの拡大に向けた科目について

・キャリアデザインの科目として、現在開講されている科目が「大学教員養成講座」のみであり、企業研究職などその他のキャリアに結び付くような新たな科目は需要が高いのではないか。科目開講の際には、企業就職、起業、研究所就職などを総合的に扱い、キャリアパスの選択肢を広げられる内容だけでなく、ある程度目標キャリアを限定した内容の科目も併せて開講して欲しい。

・アカデミアの研究と企業で行われている研究は異なるため、企業への就職後にギャップを感じてしまわないように、企業の研究職の実態を知ることができる授業内容が望ましい。また、キャリアパスについて、10年、20年後をイメージできる内容であれば将来設計を考える上で効果的である。

・具体的な希望科目：①申請書の書き方講座②企業での仕事紹介

(内容)①研究費の獲得や計画的に研究を行えるように研究計画書などの書き方について学べる科目。②製薬企業は企業秘密が多いためか仕事内容について学べる機会が少ない。実情が見えない企業の業務を紹介する科目。

●研究成果を社会実装（特許・起業）につなげるための科目について

・経営や経済等の分野は理系学生に馴染みのない分野であるため、理系学生でも抵抗なく受講できるよう、授業内容を工夫することが望ましい。また、実践的なグループワーク等を取り入れることで、将来活用しやすい、活きた知識が獲得できるのではないか。

・起業に関わる科目は主に文系学生をターゲットとした科目である印象を受ける。理系学生においても特許取得は研究成果の一つの形であるが、特許取得以外での研究成果の具体的な社会実装となると研究内容によってその手法も多岐に渡るため、授業内容の設定が困難になると考える。

・具体的な希望科目：①特許検索や実際の申請について扱う科目②起業について学べる経済学

●開講場所について

・全学開講と書かれていても西千葉のみでの開講では参加しづらい。研究時間を減らされないように亥鼻での開講やオンデマンド方式での開講を検討してほしい。